

道徳部会

自己(人間として)の生き方について考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成 ～「考え、議論する道徳」の指導方法の工夫～

大江小学校 教諭 中村 裕也 富合中学校 教諭 山口 順司
大江小学校 教諭 金野明日香

要 約

小学校、中学校ともに道徳の教科化に伴い、「考え、議論する道徳」の授業づくりに、課題を感じている教師は少なくない。そこで、本研究では、授業づくりシートを用いて授業のねらいを明確にし、道徳的価値の理解を自分との関わりで捉えることができるようにしたり、物事を多面的・多角的に考えることができるようにしたりする指導方法の工夫を行うことを中心に取り組んだ。それにより、答えが1つではない道徳的な課題に対して、多様な他者と協働しながら、めあてに応じた自分なりの答えを見出そうとしたり、自己の生き方についての思いや願いを深めようとしたりする児童生徒の姿が見られた。

1 主題設定の理由

平成30年度全国学力・学習状況調査の児童(生徒)質問紙「学校の友達との間で(生徒の間で)話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」【()は中学校】の項目に対して「どちらかという当てはまらない、当てはまらない」と答えた児童が22.6%、生徒が24.9%となっている。このことから、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、その課題と向き合う「考え、議論する道徳」へと授業をさらに改善していく必要があるということが考えられる。

そこで本研究では、自己(人間として)の生き方について考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成のため、児童生徒の実態に応じて授業のねらいを明確にし、道徳的価値の理解を自分との関わりで考えたり、物事を多面的・多角的に考えたりする道徳授業のあり方を追求したいと考え、本主題を設定した。

2 研究の仮説

道徳科の授業の中で、ねらいを明確にし、道徳的価値の理解を自分との関わりで捉えるための工夫や物事を多面的・多角的に考えるための工夫

を取り入れることで、自己(人間として)の生き方について考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒が育つであろう。

(1)「ねらいを明確にし」とは

教師が各学年の系統や児童生徒の実態、教材の特質を考慮し、考えさせたい価値を焦点化することと捉える。そのために授業づくりシートを用いる。

(2)「自分との関わりで捉える」とは

教材を通して考えた道徳的価値と自分の経験を重ね合わせながら考えを深めていくことと捉える。

そのために、導入やめあての工夫を行う。導入では、アンケート結果の振り返りをしたり、日常生活の経験を想起できるような活動を行ったりして、児童生徒が自分の課題として捉えることができるようにする。そして、児童生徒が解決したいと思うことを本時のめあてとする。また、児童生徒が自分事として捉えることができるように、自分の経験と重ねることができる発問(深める発問)を行う。これらを通して、道徳的価値の理解とともに自己理解を深めることができると考える。

(3)「物事を多面的・多角的に考える」とは

物事を一面的に捉えるのではなく、児童生徒がいろいろな立場から考えたり、自分とは違う考えを知ったりすることで、様々な視点から物事を理解し、主体的に学習に取り組むことと捉える。

そのために発問や板書、学習形態の工夫を行う。発問では考える視点を固定化しない発問(広げる発問)を行う。また、板書では思考ツールを用いたり対比させたりして、児童生徒が様々な立場の考えを視覚的に捉えられるようにする。学習形態では、机の配置や班編成の工夫を行うことで、多様な考えに触れられるようにする。これらを通して、道徳的価値の理解をもとに、人間理解や他者理解を深めることができると思う。

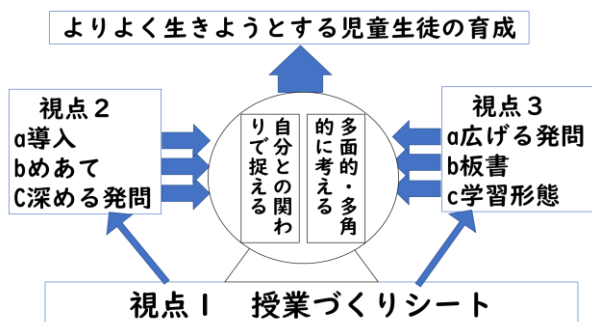
(4)「自己(人間として)の生き方について考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒」とは

答えが1つではない道徳的な課題に対して、多様な他者と協働しながら、めあてに応じた自分なりの答えを見出そうとしたり、自己の生き方についての思いや願いを深めようとする児童生徒の姿と捉える。

3 研究の視点

- (1) ねらいを明確にするための授業づくりシート
- (2) 自分との関わりで捉えるための指導方法の工夫 (a 導入、b めあて、c 深める発問)
- (3) 物事を多面的・多角的に考えるための指導方法の工夫 (a 広げる発問、b 板書、c 学習形態)

4 研究の構想図



5 研究の実際

(1) 授業づくりシート

令和元年度は、すべての授業において授業づくりシートを用いて授業を行った。授業づくりシートには、主題名、教材名、ねらい、児童生徒に期待する答え、本時のめあて、主発問、補助発問、基本発問、板書計画を書く欄を設けた。(図1)

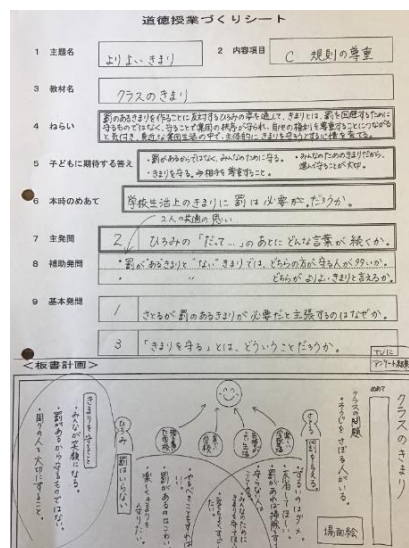


図1 授業づくりシート

(2) 小学校第6学年での取組

①授業について

主題名「よりよいきまり」C規則の尊重
教材名「クラスのきまり」日本文教出版
ねらい「きまりを守ることは集団の秩序・自他の権利を守ることに繋がると気づき、身近な集団生活の中で主体的にきまりを守ろうとする心情を育てる。」

ア 視点(2) a 導入

導入では、事前に行ったアンケートの結果を電子黒板に提示し、きまりについて考えるという本時の学習の方向性を示した。そのことで、全体的にはきまりを守っているが、時々守らないことがあるという学級の実態とその理由について共有し、児童が自分自身の課題として捉えていた。

イ 視点(2) b めあて

児童からは罰が必要と不要の両方の意見が出されたので、児童の疑問を解決するために本時のめあてを「学校生活上のきまりに罰は必要か」とした。そうすることで、「学校生活上のきまりは、生活を縛るためではなく、みんなが気持ち良く安全に過ごすためにある」という教師が児童に気付かせたいことについて考えられるようにした。

ウ 視点(3) a 広げる発問

罰が必要と考える児童が多いという学級の実態に鑑み、主人公のひろみが「罰はいらない」と主張する場面を中心発問にした。主張の理由を様々な視点から考えることで、主体的にきまりを守ることの大

切さに気付いていった。

エ 視点(2) c 深める発問

罰が「あるきまり」と「ないきまり」はどちらが守る人が多いかを問い、次にどちらがよいきまりかを尋ねた。児童の多くが「守るのは罰のあるきまりだが、よいのは罰がないきまり」と考えた。そこで、「守る人の多い方がよいきまりではないか。」と問い返すことで、児童がきまりは自分たちの生活を縛るものではないということに気づき、主体的にきまりを守ることの大切さについて考えを深めていた。

オ 視点(3) b 板書

罰が「必要」と「不要」という登場人物の主張が対立する部分と、その中にある共通した願いを児童が視覚的に捉えやすくなるように思考ツールとしてベン図を用いた。(図2)

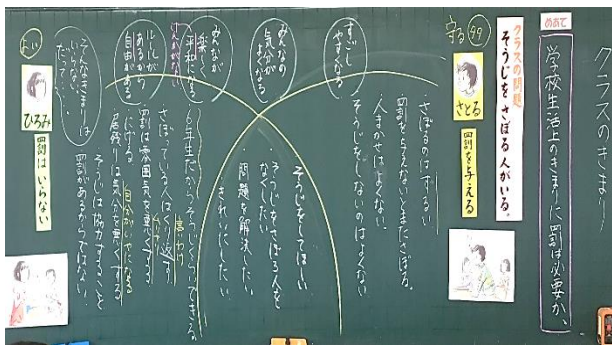


図2 ベン図の活用

(3) 中学校第3学年での取組

①授業について

主題名「自分自身と向き合う」Dよりよく生きる喜び

教材名「二人の弟子」文部科学省『私たちの道徳』ねらい「自分の弱さや醜さに向き合い、それらを克服しようとする強さや気高さに気付くことで、よりよく生きる喜びを見出そうとする態度を育てる。」

ア 視点(2) a 導入

導入では、著名人が涙を流している写真を数枚提示した。生徒は、それらの涙が様々な思いから溢れ出たものであることを実感していた。そして、生徒自身がこれまで涙を流した経験を想起するとともに、教材の主人公の智行が流した涙の意味について考えるきっかけとしていた。

イ 視点(2) b めあて

話の内容を振り返った後、智行が涙を流したきっかけとなった師の上人の「自分自身と向き合う」という言葉の意味について考えることを本時のめあてとした。

ウ 視点(3) a 広げる発問

上人が修行に励んできた智行に厳しい言葉をかけた後、智行が涙を流している場面を中心発問とし、智行がどんな思いで涙を流しているのか、何に気付いた涙なのかを考える発問を行った。「友の道信のやり直したい気持ちを否定し反省する涙」「上人のように広い心で許せず悔しい涙」「自分自身をわかっていなく、修行不足に気付いた涙」「道信を見下し、自分の心の黒さに気付いた涙」など、生徒は様々な視点から理由を考えていた。

エ 視点(2) c 深める発問

本時のめあて「自分自身と向き合う」とはどのような意味なのかについて考えた。「相手が悪いと思ってしまうことが今までに何度もあったけど、智行のように自分自身と向き合ってみて、自分がいけなかったところを考えていきたい」など自分のこれまでの経験から表現し、自己理解を深めている記述が見られた。

オ 視点(3) b 板書

智行と道信のそれぞれの家柄、修行の様子、道信が修行に戻ってきたときの智行の思いなどを板書上で色分けしたり対比したりして、違いが明確になるようにした。

カ 視点(3) c 学習形態

本学級で年度当初実施したアンケートでは、道徳科の授業があまり好きではないという生徒が1/3いた。その理由として発言、話合いが苦手であるという生徒が多く、議論が深まりにくい実態があった。そこで、班での議論が深まるように、①自分が安心して意見を言える人、②日常生活の中で自分とは見方や考え方が違う人についてのアンケートを取り、①と②がバランスよく組み合わせるように3~4人の班編成を行った。生徒は多様な考えに触れることで、道徳的価値の理解をもとに、人間理解、他者理解を深めていた。

(4) 小学校第5学年での取組

①授業について

主題名「本当の親切」B 親切、思いやり

教材名「くずれ落ちただんボール箱」日本文教出版
ねらい「真の親切とは、見返りを求めずに相手の立場に立って親切な行動をすることだと気づき、誰に対しても思いやりの心をもって親切にしようとする心情を育てる。」

ア 視点(2) a 導入

導入では、本時の内容項目である「親切、思いやり」に関するアンケート結果を用いた。そうすることで、児童が身の回りの親切について想起し、自分たちに関わる内容であることが意識できるようになり、本時の学習への意欲が高まった。

イ 視点(2) b めあて

困っている人がいたときに、「感謝されるなら手伝う」や「仲良しの友達なら手伝う」という限定的な親切をする人がいるという実態があった。そのことから、本時のめあてを「本当の親切について考えよう」として、見返りを求めずに誰に対しても分け隔てなく親切にするよさを考えていくことにした。

ウ 視点(3) a 広げる発問

教材では主人公の「わたし」が、おばあさんに感謝されたり、店員からお詫びの手紙をもらったりしていた。しかし、実生活では、自分が親切な行動をしても感謝されたり認めてもらえなかったりするときもある。そこで、もしおばあさんに感謝されなかったり店員からお詫びの手紙が届かなかったりしたら、その後の「わたし」は親切な行動をするかについて考えることを中心発問にした。「自分だったら」ではなく登場人物の「わたし」について考えさせることで、「もう親切な行動はしない」という人間理解の部分が表出していた。

エ 視点(2) c 深める発問

児童が教材について話し合いをしていく中で、本当の親切とは誰にでも親切をすることであると気付いていた。そこで、「自分たちの周りに本当の親切をできている人がいるか。」を問うことで、児童の思考が教材から自然と離れ、道徳的価値を自分たちの身近な経験と関連させて考えていた。児童が授業の最後

に書いた学習シートには、道徳的価値についての自分の考えや自分の経験と重ねて考えたことが書かれていた。(図3)

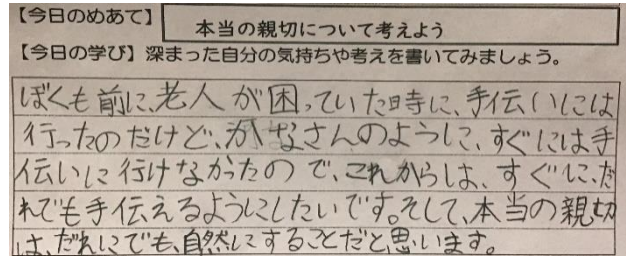


図3 学習シート

6 研究の成果と課題

(1) 成果

○視点1について、授業づくりシートを用いて考えさせたい価値を焦点化することで、各内容項目の道徳的価値について児童生徒が考えを深めていた。また、教師のねらいと、本時のめあて、児童生徒による振り返りの学習シートの記述に一貫性がある授業を行うことができた。

○視点2について、導入やめあて、深める発問の工夫を行ったことで、児童生徒の問題意識が高まり、物事を自分との関わりで捉えられるようになった。

○視点3について、広げる発問(中心発問)の工夫をしたり、板書において思考ツールを用いて考えの相違点や共通点を可視化したりしたことで、児童生徒が多面的・多角的なものの見方や考え方ができるようになった。

(2) 課題

○毎時間の授業を考えていくうえで、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度の中での諸様相を育てることを目的とするか悩むことがあった。今後は道徳性の諸様相についても研究を重ねていく必要性を感じた。

○ねらいにより迫ることができるように、児童生徒に問題意識をもたせる工夫や、めあてを提示するタイミングについて研究を継続していく必要がある。

7 引用文献・参考文献

文部科学省『小学校・中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』2017年